中国語の数詞と量詞の考察

汉语的数词和量词

手　塚　宗　平

目　次

一. 前書き
二. 数詞の種類
三. 数詞の活用
四. 量詞の種類
五. 量詞の応用と注意点
六. 数量詞
七. 擬態数量詞
八. 後書き

一. 前書き

日本語と多くの共通点を持つ外国語というのは勿論中国語である。それは，同様の漢字を使用する語学というだけではなく，漢字の発音においても日本語の音読みでは中国語の発音とよく似ている。特に，単音節（一字一音）のしくみは全く同じである。

しかし，漢字に対する意味の解釈とその使用方法はすべて同じとはいえない。むしろ，多くの差異が存在している。日本語と中国語双方全く同じ使用方法といえる漢字は，“数詞”であるが，“量詞”に関してはそういう訳にはいかない。ほとんどの“量詞”の場合，日中双方それぞれ異なる漢字を使用し，かなりの相違が目立つのである。“数詞”と“量詞”の結合体“数量詞”

では，互いの共通点は見られない。特に，“数詞”から発展したことわざの場合かなりの相違点があり，それぞれ類似する意味のことわざの対照字典がどうしても必要である。そして，それは，研究者達にとって最も苦労の多いところとなる。

二. 数詞の種類

数詞は，“基本数詞”と“順序数詞”との二種類に分けられる。“基本数詞”とは，一，二，三，四，五，六，七，八，九，十，百，千，万，億，兆，京…などであり，それらの“基本数詞”の組み合わせにより全ての整数が表現可能である。例えば，“十”と“一”で“十一”に“二百”と“五”と“十”で“二百五十”に“三千”と“六百”と“七十”と“八”で“三千六百七十八”…など，すべての整数はあくまで“基本数詞”からの組合物である。

“順序数詞”とは：物事の順序表現に使用される。例えば，“第一”“第二”“第三”…あるいは，“一番目”“二番目”“三番目”…“一着”“二着”“三着”…等のように物事の順序表現の役割が出来る。しかし，その“順序数詞”も場合により，表現しているその順番がそれほど大事でない時“第”をつけることが出来る。これがいわゆる“擬似順序数詞”である。例えば，“三年生”は“第三年生”とは言わない。また，“三月”を“第三月”とも“三十才”を“第三十才”とも言わない。このように，物事の順序のように見えてもその順序は必ずしも大事なこととは考えられない場合もある。

三. 数詞の活用

中国語の“基本数詞”とその組み合わせ表現は，日本語とほぼ同様と考えられるが，中には中国語特有の表現もある。以下，日本語と中国語の数詞表現の差異を取り上げる。

①整数の表現に対する注意点

確かに中国語の整数表現は日本語とだいたい同じである。例えば，“十”“一”で“十一”というように非常にわかりやすい表現である。その点，英語では“テン”と“ワン”で“テンワン”というようなことはしない。“イレブン”という単語を使用するというように，整数の表現方法には，日本語や中国語とはかなりの相違点が見られる。特に英数字のケタの中に“万”という単位表現がないので，どうしても日本語や中国語とのケタ表現が“ケタ違い”の結果になる。

中国語と日本語には，共通の“万”や“億”“兆”…などの単位があるので，英語のような“ケタ違い”の感覚はない。しかし，中国語と日本語の数字表現方法が全く同じと言えるのは，“九十九”までのことで，それ以上の場合は多少の相違がある。

日本語は“百”と“千”を表現する場合，そのままで良いが，中国語の場合では必ず“一”を付け加えなければならない。つまり，“百”のことは“一百”，“千”のことは“一千”と表現する。従って，“百五十”も“一百五十”で，“千五百”も“一千五百”となる。その点，日本語の“万”の単位表現を考えればすぐ理解出来る。“千五百”とはいうが，“万五千”とはならない。中国語同様“一万五千”というように表現しなければならない。つまり，中国語の“数詞”の組み合わせ表現は，“百”，“千”，“万”や“億”など単位表現が皆一致しているのに対して，なぜか日本語の方は不一致である。勿論，“百”と“千”のケタだけでなく，その上の“百万”“千万”“百億”“千億”“百兆”“千兆”も皆異なり，中国語では“一百万”“一千万”“一百億”“一千億”…などと表現しなければならない。従って，“百五十万”や“百五十億”などを中国語では“一百五十万”・“一百五十億”となる。

また，中国語では“基本数詞”の組み合わせによる整数表現中，もし，上のケタと下のケタの間に“0”が存在する場合，その“0”は“零”で表現する。例えば，“101”は“一百零一”“303”は“三百零三”のようになる。しかし，上のケタと下のケタの間に“0”がいくつもある場合，“零零”や

“零零零”とは表現しない。つまり“10001”は“一万零一”で，“10035”は“一万零三十五”となる。

また，中国語の整数表現で，三ケタ以上の整数にはよくつづきのケタの表現の場合最後のケタを省略する。例えば，三百五十を“三百五”三千五百を“三千五”三万五千を“三万五”そして，三万六千五百を“三万六千五”というように最後のケタを省略することが，習慣である。それはお金の表現の場合も同じである。中国人はお金を表現する場合最後の名称は省略する。例えば，“三元五角”のことを“三块五”“三角五分”のことを“三毛五”“三元五角六分”の場合は“三块五毛六”のように最後のケタの名称を省略する。

上述のように，中国語の“基本数詞”による組み合わせ“整数”の表現方法は，確かに日本語の表現と多少の相違は存在するが，英語ほどの相違はみられないので，その点中国語の方が英語より理解しやすいはずである。

②“二”と“两”の違い

中国語の“基本数詞”の中に“二”の場合のみ，時々“两”と入れかえすることがある。両者の役割はかなりの相違がある。“二”は“基本数詞”にも“順序数詞”にも使用するが“两”は“基本数詞”のみ使用可能である。つまり，中国語では“第二天”“第二年”と表現はするが“第两天”“第两年”とは表現しない。

しかし，“量詞”との組み合わせでは，一般には“二”よりも“两”の方がよく使われている。そのため，“二”と“两”の表現の違いを説明しなければならない。まず，“二”は基本数詞でありながら順序数詞でもある。したがって，“二位客人”“二尺布”“二节课”などの表現は成立する。また，“第二位客人”“第二尺布”“第二节课”の表現も可能である。勿論，“二位客人”と“第二位客人”，“二尺布”と“第二尺布”そして，“二节课”と“第二节课”などそれぞれの意味は全く異なる。しかし，どちらの表現もおかしいことではない。次に，“两”は基本数詞にしか使用出来ないので，“两位客人”と“二位客人”“两尺布”と“二尺布”そして“两节课”と“二节课”の意味は全く同じである。ただし，一般的にはむしろ“两位客人”と“两节课”“两

尺布”の方がよく使用されている。そのかわり，“两”は順序数詞では使用不可能なので，“第两位客人”や“第两尺布”や“第两节课”などの表現は成立し難い。そのため，“二”のような“二位客人”“第二位客人”のように両方共使用可能にはならない。

しかし，“二”がすべて両方使用可能とも言い難い。“两尺布”を“二尺布”“两位客人”を“二位客人”は成立するが，“两个女朋友”の代わりに“二个女朋友”では成立しない。その点大変微妙な差がある。

また，“二”を順序数詞で表現する場合，確かに“第”をつけるが，しかし“第”をつけなくても順序表現は可能である。例えば“二少爷”と“二太太”のように“第”をつけるとかえって不自然である。“第二少爷”“第二太太”などの表現はあまり見られない。しかも“二少爷”“二太太”の場合，二人の少爷（ぼっちゃん）あるいは二人の太太（奥さん）の意味ではなく，あくまでも“二少爷”は二番目のぼっちゃんを指し，“二太太”は二号さんのことである。もちろん，この場合では，“两少爷”“两太太”では成立不可能なのである。

上述のように，数詞と量詞を組み合わせる場合“二”より“两”の方が適当である。例外的に度量衡の表現の場合は，“二”と“两”のどちらも全く同じ役割である。例えば，“两里路”と“两斤米”を“二里路”と“二斤米”に表現をかえてもよい。

また、“数詞”と“量詞”を組み合わせる場合“两”よりも“二”の方が適合するような非常に珍しいケースもある。それは銀の単位である。昔から，中国では銀を“两”で測るが“二两银子”とは言うが，“两两银子”とは言わない。それは，数詞の“两”と量詞の“两”は同じ字なので非常に聞き取りにくいからである。

最も外国人研究者を悩ませることは，度量衡の連続した単位表現である。中国語の度量衡の表現は，実に難しく，特に単位が異なる場合，前方は，“两”を使用するが，後方では“二”を使用しなければならない。例えば“两尺二寸”“两斤二两”“两亩二分”などは正しいが，“两尺两寸”“两斤两

両”“两亩两分”などとはいわない。その理由を具体的に説明出来る人は，おそらくいないだろう。あくまでも日常生活の言語習慣なのである。それと同様，“两”は基本数詞であり，常に数を表現することになる。“两斤”“两个”“两条”“两尾”…などすべて二つの数を意味する。

しかし，例外的に中国人が麻雀する場合，“二万”の牌を“两万”という。従って，“二，五，八”の三面チャンを“两，五，八”で発音する。中国人のみでなく日本人の愛好家でも中国語で発音している。勿論，日本人の愛好家達が皆中国語が堪能と言うわけではない。しかし，なぜか，麻雀をする時に限り中国語で数詞を発音する。実に不思議なことである。

“二”と“两”の区別で最もわかりにくいケースは，基本数詞の整数表現の場合である。中国語は，二百，二千，二万，二百万，二千万，二億…などは，皆，两百，两千，两万，两百万，两千万，两億と表現出来る。しかし，なぜか“二十”と“二十万”と“二十億”……など“二十”と関係ある整数だけは，“两”の表現は不可能である。つまり，“两十”“两十万”“两十億”…などは勿論のこと“两十一”“两十二”…などの表現も成立しない。そのようなことは，原則というより例外としか言いようがない。つまり，学問的に説明出来る訳でなく，日常生活の智恵での会話が妥当である。

義務教育の普及がまだ完全ではない中国の奥地には，学校へ行かない人々もいる。しかし，その人々の使用している中国語の方が，外国の語学専門家達より，正しい中国語を流暢に使用していることは事実である。それは，日本語においても同様のことが言える。東京山谷地区と大阪西成地区の日雇い労働者の使用する日本語の方が，外国人の語学専門家達よりも上手なことは決して不思議なことでも何でもない。

③倍数と約数

中国語の数詞表現の中の倍数表現は，あくまでも増加する数量を表わすものであり，減少する時には使用不可能である。従って，“多了一倍”“大一倍”とは言うが，“少了一倍”“小一倍”とは言わない。

しかし，倍数の概念も決して固定したことではない。それは，日常生活の

習慣に左右されることになる。つまり，中国人の柔軟した性格とも関係がある。

例えば，

张三的田比李四的田大一倍。

（張さんの田んぼは，李さんの田んぼより倍である。）

その時の“大一倍”は，二倍になる。

しかし，

张三的田比李四的田大一百倍。

（張さんの田んぼは，李さんの田んぼより百倍も広い。）

その時の張三は李四の百一倍ではなく，あくまでも百倍である。その点の解釈は，同じ中国人でも定説はありません。特に“大十倍”に対する考え方は，“十倍”と“十一倍”の両方とも成立する。実に難解であるが，それは，中国人が言葉の正確さより使い易さに重点を置く現象の表われでもある。

中国語の約数を表現する場合，よく“多”“来”“几”などの漢字を付け加える。

例えば，

我今年已经五十多岁了。

（私はすでに今年で五十いくつになる。）

这条河宽十来尺。

（この川の広さは十何尺である。）

教室里有三十几个学生。

（教室の中に三十何人の生徒がいる。）

このように“多”“来”“几”三つの漢字の役割は，全く同様である。ただ注意しなければならないのは，“多”“来”“几”の前の数詞は零でなければ成立しないことである。例えば，“五十一多岁”“十二来尺”“三十五几个学生”などの表現は不可能である。その時は，“五十一岁左右”“十二尺多一点几”“大概三十五个学生”などの方法で表現する。また，二ケタ以上の整数表現も同様の方法である。“三千五百多块”“十三億多人口”などの表現は成

立する。“多”の使用方法は非常に便利なものである。“五十多岁”のような量詞の前に置くことも出来，また，“五十岁多”“十五点多”“四公斤多”などのように量詞の後に置くことも出来，それは，“来”“几”ではまねの出来ないことである。

④数詞の総数と差数

中国語の数詞の前によく“增加到”と“增加了”を付けることである。一般的に，“增加到”の後の数詞は総数を表わし，逆に“增加了”の後の数詞は“差数”を指す。

例えば，平成8年度の筆者の中国語履修者は例年より増えた。例年各クラス約70名であったが，今年はなぜか各クラス100名を越えた。これを中国語で表現する場合は，

“今年汉语的送修学生增加到每班一百多人。”

（今年の中国語の履修者はすべてのクラスに百人余りまで増えた。）

“今年汉语的送修学生增加了百分之四十。”

（今年の中国語の履修者は四十％程度増加した。）

つまり，“数詞”の総数と差数の表現は非常に間違い易く，それを“增加到”と“增加了”で使い分ける方が便利である。

四．量詞の種類

“量詞”は，物事を数える場合に使用する数え方である。中国語では，“量詞”を“動量詞”と“物量詞”の二種類に分類する。

①“動量詞”は，物事の具体的姿とその存在を区別しにくい現象の場合で使用する。一般的に“遍”“回”“次”“趟”“顿”“番”“场”“阵”“节”“堂”…などの量詞がある。

また，時間を表現する場合使用する“秒”“分”“刻”“点”“天”“星期”“月”“年”“分钟”“钟头”“小时”などの時間量詞である。

②“物量詞”は，物事の具体的姿と継続的存在表現の場合の量詞である。

また，その用途により分類も可能である。

甲．度量衡量詞

ア．長さ，高さ，広さ，深さと距離など測定する場合に使用の量詞

公分（センチ），公寸（十センチ），公尺（メートル），公丈（十メートル），公里（キロ），分，寸，尺，丈，里…などがある。

イ．重さを測定する場合使用の量詞

公克（グラム），公斤（キロ），頓（トン），两，斤などがある。

ウ．広さを測定する場合使用の量詞

平方公尺（平方メートル），平方公里（平方キロ），坪，亩，顷などがある。

乙．個体量詞

量詞の中で最も種類の多い量詞である。つまり，個体のある物を数える時使用の量詞。しかも，それぞれの物によって数え方が違うので，大変難しいことである。ここでひんぱんに使用の例をいくつか取り上げてみる。

一个学生

（生徒は一人）

两位客人

（二人のお客さん）

三张车票

（切符三枚）

四条河

（四本の川）

五本小说

（小説五冊）

六朵花

（花六りん）

七匹狗

（犬七匹）

八头牛

（牛八頭）

九尾鱼

（魚九匹）

十口猪

（豚十頭）

その他，片，棵，颗，碗，析，只，项，瓶，壶，道，项，块，根，支，座，车两，架，台，艘，把，粒，间，柞，封，贴…などがある。

また，同じ名詞にいくつかの“量詞”を使用することもある。例えば“一个女学生”“一位小姐”のように“个”と“位”は，どちらも人間につける“量詞”である。しかし“个”は人間以外にも広く使用されている。しかも，最もよく使用される“量詞”である。“位”は人間以外には使用出来ない。ただし，人間の総数を表わす時，場合により“量詞”を省略することもある。例えば，

中国的人口有十三億人。

（中国の人口は十三億人である。）

その場合，“十三億个人”また“十三億位人”とは表現せず，そのような“量詞”を省略することが多い。

また，同じ名詞でも，個体の形，数量，大きさなどの差異で，使用の“量詞”が違う。例えばお酒の場合，一滴酒，两口酒，三杯酒，四碗酒，五瓶酒，六壶酒，七斤酒，八桶酒，九打酒…など様々な“量詞”を使い分けることになる。

また，同じ芝居のことを中国語では，“一出戏”“一幕戏”“一场戏”などで表現する。それぞれ多少異なるニュアンスも考えられるが，だいたいは同じである。

一般に“量詞”の前に“数詞”をつける。しかし，時には“指示代詞”を付ける場合もある。ただし，その場合日本語に訳す時，その“量詞”は訳さないで，単に“の”で訳す。例えば，

这根香蕉

（このバナナ）

那朵花

（あの花）

哪位小姐

（どの女）

丙．集合量詞

複数の个体をグループにした集合体として表現使用の量詞，中国語ではそのような集合量詞も沢山ある。集合した个体の種類によって様々な集合量詞を使い分ける例としていくつか取り上げてみる。

一对春联

（一対の春联）

两双鞋子

（二足のくつ）

三批货

（三個の貨物）

四打啤酒

（四打のビール）

五包烟

（タバコ五箱）

六箱行李

（荷物六箱）

七袋米

（お米七袋）

八桶水

（水桶八杯）

九盆花

（九ハチの花）

十套卓椅

（机と椅子十セット）

その他，群，帮，排，列，班，団，家，推，厢，队…などがある。

“个体量詞”と“集合量詞”が時々混合する場合もあり，厳格に分けることは不可能なことである。従って共通に用いることもある。

丁．時間量詞

時間を表わす用語

例えば，秒，分，刻（十五分），点（時），星期（週間），月，年，分钟（分間），小时（時間），钟头（時間）…などの時間量詞がある。

五．量詞の応用と注意点

一般に“量詞”の単独使用は出来ないが，例外として同量詞を重ねて表現する場合，主語として使用する時もある。例えば，

①台湾的香蕉“根根”甜美。

（台湾のバナナはすべておいしい。）

②院子里的花“朵朵”鮮艶。

（庭の花は全部きれいである。）

③缸里的鱼“尾尾”好看。

（水槽の中の魚はすべてきれいである。）

④参加今晩宴会的女士们“个个”高贵。

（今晩のパーティーに出た女は皆上品である。）

上述のように，同量詞の重ねての使用は，名詞としての役割で成立し，それ以外の場合は，量詞が数詞と切り離されて存在することは不可能なことである。

六. 数量詞

中国語では，“量詞”は単独で存在しないため常に数詞と組み合わせて表現する。それを“数量詞”という。“数量詞”は“量詞”と同様，後にくる名詞により，それぞれの妥当な“数量詞”を選択しなければならない。その点に関して“量詞”と全く同様である。

しかし，“量詞”と異なる点は，“数量詞”の後が必ずしも名詞とは限らないということである。時には形容詞と組み合わせることもある。

例えば，

“一公分厚”“两尺长”“三丈深”“四千公尺高”“五十公斤重”…などの表現も出来る。

また，“数量詞”の後でなく前に動詞をつけることもある。

例えば，

“去一次”“来过两趟”“看了三遍”“喝一口”“吃过两次”“听了三回”…などの表現もよくあり，それらは皆“数量詞”として成立する。

七. 擬態数量詞

中国語は，数詞の“一”と様々な“量詞”を重ね合わせて表現する，いわゆる“擬態数量詞”もある。その場合の“一”は数詞としての意味とはかなりの差がある。

例えば，

老师闲始一个一个点名。

（先生は一人ずつ点呼を始める。）

その場合，“数量詞”の“一个”の役割は，一人ではなく逐次のことである。

また，数詞の“一”と同量詞の組み合わせの表現もある。その時の“一”も一つの意味でなく，“多数”の意味あるいは全体的な意味である。

例えば，

学生们一个个都很用功。

（生徒達は皆非常にまじめである。）

また，表面上“数量詞”に見えても実際に“数量詞”とは言えないこともよくある。例えば，“一会儿”“一点儿”“一下子”“一阵子”などの熟語は，“两会儿”“两点儿”…などの表現にかえることは出来ない。つまり，その時の“一”は数詞とは異なる存在なのである。従って，中国語の“一”は，数詞でありながら数詞とは言えない存在が多い，いわゆる擬態数詞である。つまり，“一”と組み合わせる量詞は，大部分擬態数量詞に属する。そして，擬態数量詞からことわざへ発展していく。中国語のことわざの中に数詞を含むものはすべて擬態数詞であり，その数詞は，決して正確な数を表現するのではなく，単に例句にすぎない。例えば，

一箭双鵰

（一石二鳥）

それは，日常会話でよく使用されることわざであるが，その数詞をかえることはとても考えられない。すなわち，“两箭四鵰”のような表現では成立しない。

八. 後書き

数詞と量詞は，日常会話でよく使用されているが，残念ながら学問的に真剣に研究されてはいないのが現状である。それは，日常会話と学識との微妙な差のあらわれであり，日常会話の表現が必ずしも完璧な文法により構成されているとはいえない。あくまでも，長年の日常生活から生まれた智恵による用語の習慣である。いわゆる，言葉のしきたりともいえる。従って，日常会話の学習には，やはり，長時間の努力が不可欠であり，決して一朝一夕で習得出来ることではない。

参　考　資　料

黄政光「语法初步」仁愛書局　1976年
余忠正「漢语中的数词」信義出版社　1987年
许勢常安「初级中国语语法」大学書林　1981年
上海師範学院「语法」上海教育出版社　1978年
孫国雄「现代漢语语法研究」商務印書馆　1979年
王光仁「现代语法」中華書局　1978年
林国辉「数词与会话」秀峯書局　1982年
杜邦重「量词的種類」闲明出版社　1981年
蔡篤勝「数词常識」信安書局　1975年
朱健蔵「现代语法」太原書局　1983年